樋爪館
比爪館
肥爪館
火爪館

ひづめだて

2023(R5).12.20
第１５０号
樋爪館懇話会

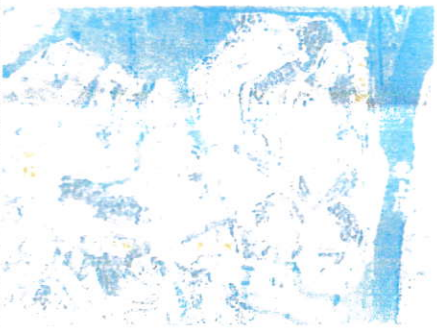
事務局　〒028-3310 紫波町日詰駅前1-10-2　赤石公民館内　Tel 019-676-3999

戦国期の斯波御所と高水寺城　12月3日定期講演会

花巻市教育委員会 文化財専門官 室野秀文氏が講演

室町時代、斯波郡(紫波郡)高水寺城の斯波氏は、大崎氏・最上氏の奥羽両探題と並ぶ家格を保持。斯波御所としてこの地域に大きな影響力を持っていた。天正１６年(1588)８月南部信直によって高水寺城を追われ滅亡した。斯波氏に関する同時代史料は殆んど残されず実態が把握しにくいことなどから、後に盛岡藩主として存続した南部氏の歴史の蔭に隠されてしまった感が強い。

一方、斯波氏の本城である高水寺城は、この地方最大の規模を誇り、城の外郭部や城下城を見ると、高度な政治拠点として構成をとりつつあったことが窺える。さらに周辺城館の環境や分布、構成を併せて考えると、戦国斯波御所の威勢と影響力は、斯波郡、岩手郡に留まらず、より広域に及んでいたことがわかる。



斯波御所高水寺城(資料より転写)
本丸を中心とした本体部分に向山、吉兵衛館、戸部御所等、斯波氏一族の居館、さらに広大な外曲輪を備える

高水寺城は、鎌倉時代以来、斯波郡を拠点とした斯波氏の居城であり、現在でも城跡の範囲や地形が概ね残されている。大規模な城域は、当時「奥の斯波殿」や「斯波御所」と貴ばれた斯波氏の勢力を如実に物語る城跡です。

紫波町は、古代須恵器生産の窯跡や、樋爪館を始めとする平泉の関連遺跡、鎌倉幕府創世に関わる陣ヶ岡等重要遺跡の宝庫であります。高水寺城も重要な城館跡として適切な保存・活用を図ることが大切です。今後も斯波氏に思いを馳せながら、高水寺城跡や関連する史跡に親しみを持ち、未来へ伝えていただきたいと思います。

樋爪館関係資料集

第１３号発刊

本会事業である樋爪館関係資料集第１３号を発刊した。この資料集は、前年度の月例発表会に用いました資料等を一冊に収録したものである。

月例発表会は、樋爪館に拘ることなく、発表者が自由にテーマを設定し、自身研究によって作成されたものを一人５０分程度で発表している。

表紙の写真 五郎沼の古代蓮

俳句　三島黎子(宇部真澄)

第６２回平泉芭蕉祭全国俳句大会にて審査員二氏にそれぞれ天賞・地賞に選出された句

「 古代蓮
一花(いっか)のなかに
ある浄土 」

撮影　平井和夫

≪≪令和６年１月～２月行事予定のお知らせ≫≫

令和６年 １月１７日 (水曜日)	第１４６回 月例発表会	時間：午後７時～９時 場所：赤石公民館 和室　※配付資料を持参のこと 発表者 宇 部 真 澄 テーマ 陸奥話記を読む④ (1/17) 陸奥話記を読む⑤ (2/21)
２月２１日 (水曜日)	第１４７回 月例発表会	発表者 宮　良 男 テーマ 日本の仏教㉑曹洞宗(2)永平寺と道元(1/17) 日本の仏教㉒曹洞宗(3)永平寺と道元(2/21)

令和５年１１月１６日に開催した月例発表会において、発表者が用いました資料から抜粋し、さらに文章は縮めて掲載した部分がありますのでご了承願います。

浅沼幸男「落ち延びた斯波詮直と稲藤大炊介一族の動向」

高水寺城斯波氏の家老一族の末裔は‥‥

１．高水寺城主、斯波詮直と一族滅亡の経緯

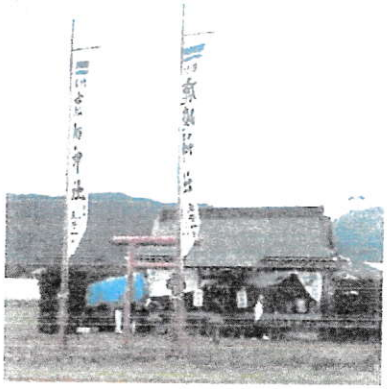
天正１６年(1588)に斯波詮直の施策に不満を持ち、家臣の築田詮泰、岩清水義教らが蜂起した。その機を見て、南部信直は古館の陣ケ岡に集結。一気に高水寺城を攻撃し占拠した。ここから斯波氏の逃避行が始まる。これが一般的にいわれている「高水寺城」「斯波氏滅亡」の顛末である。

戦に敗れ居城を追われた斯波詮直は、家臣の居住地を転々し、後に数人の家臣を連れて山王海から雫石の大村、湯田、山内、横手を経て日本海沿いを南下し、本荘辺りから宮城大崎の奥州探題(斯波氏の本家とも分家都言われている。)の一族の大崎氏を頼って落ち延びたといわれている。３～４代前の斯波高詮は大崎氏から高水寺斯波家に養子として入ったとの説もある。　**※高水寺斯波家の家系図は複数あれどどれが本当か不明。**

その時に斯波詮直に同行したといわれるのが、斯波氏の重臣で、志和の稲藤に「稲藤館」(形状からフクベ館ともいわれる。)を構える**「稲藤大炊介」**である。推定だが明治時代後半に地域の方々が屋敷内にあった墓石を集積し、共同墓地としたようだ。

稲藤一族の居館があった「稲藤館」(別名フクベ館)の所在地を示す標柱

「稲藤館跡」は、現在共同墓地になっている。



稲藤大炊介が勧進した鹿島神社
天正１１年(1583)に創建
(紫波町上平沢字久田)

【上記写真３枚は、発表者の資料より転写(発表者撮影)】

２．斯波詮直の行方は‥‥

斯波詮直は一族の大崎探題の大崎氏を頼って、宮城大崎まで家族を連れて落ち延びたことは確かだが、その後の足取り行方は不明だ。だが、大崎氏も伊達正宗の勢力拡大で劣勢になっていた。大崎から一族のルーツのある関西に落ち延びたことは想像できる。

(発表者推測) 正式の記録はないが、次の３つの情報がある。

① 南部藩に残る伝説には、年代がわからないが、大崎から京都に向い、窮乏の挙句、紀州藩に仕官したいと出向いたらしい。だが願いはかなわなかった。(八戸藩１６代当主からの聞き取り。)

② 豊臣秀吉亡き後の「大阪冬の陣」で南部氏の旗の下、徳川方で参戦したとの伝聞がある。しかし格下だった南部氏の旗下にいることが不満で、以後は牢人(浪人)として京都で暮らしたという説。また京都で二条家に仕えたという説。(ウィキペディア)

③ 加賀藩士に津田氏という人物がいた。斯波氏の末裔と称し、明治の初め「斯波」に改姓し、明治政府から「男爵」の称号を与えたという記録がある。「斯波」姓は、全国にあり高水寺城の斯波氏と特定するには至らない。ルーツは紫波なのだが末裔が各地に多い。斯波詮直はいずれにせよ関西方面に落ち延びたと推測される。

３．稲藤大炊介一族とは

「稲藤」という地名は昔からあるが、地頭と思わしき「稲藤氏」の出自は不明である。ただ、紫波の上平沢には、稲藤姓の家が３軒あり、この稲藤氏の分家筋の末裔である。

しかし、志和の土舘「新山神社」に残っている「新山権現垂迹縁起」には、「稲藤兵衡恒親」という名が出てくる。文治５年(1189)の源頼朝が平泉藤原泰衡追討のために、陣ヶ岡に布陣した。その時のエピソードが記載されているが、稲藤氏一族の先祖と思われる稲藤兵衡恒親という名が文治５年に稲藤の地頭として稲藤館にいたことが判る。

もちろん稲藤氏は土地の名を姓としている。「稲藤」はアイヌ語に語源があるとの説。新山権現垂迹縁起の記述から約４００年後。天正１６年(1588)に、斯波氏の重臣として稲藤兵衡恒親の末裔であると思われる稲藤大炊介が歴史に登場するのである。

４．高水寺城滅亡後、斯波詮直を大崎に同行した稲藤大炊介一族

斯波詮直は天文１７年(1548)の生まれといわれているから、敗走した時は満で４０歳ということになる。稲藤大炊介は若干歳が若かったのではと推測する。

稲藤大炊介は、どのような理由があったのか不明だが、そのまま大崎に留まったのである。大崎氏も伊達正宗の侵攻で衰退の一途を辿っていた時期でもある。

紫波から落ち延びる時には、稲藤大炊介の他に、二人の弟も連れている。この二人の弟は現地の稲藤家の伝承として、大崎田尻に住みついたときに「遠藤」(次男)、「門間」(三男)とに姓を変えて居住したようだ。現在は遠藤家が隣地にあるが、門間家は明治になってから北海道伊達に渡ったらしい。

５．稲藤氏は涌谷伊達家に仕官している

《涌谷伊達家とは》元々は伊達正宗の祖父時代に分かれた伊達一門。天正１９年(1591)に知行地替えとなり涌谷に移住。三代定宗のときに涌谷伊達家を名乗る。ほぼ同時期に稲藤大炊介も紫波から大崎に移り、この地域にある田尻に移住したことになる。

田尻の稲藤家の言い伝えでは「大崎氏を頼ってきたが、大崎氏は衰退を辿り、勢いを増した伊達家の[足軽]か[足軽頭]として禄を食むことになった。」ということである。

斯波詮直の家老格だった稲藤大炊介は身分が軽くなったが、涌谷伊達家に召抱えられかろうじて武士として面目を保ったものと推測される。

６．奈良にも稲藤氏の末裔がいた

① 奈良桜井の初代稲藤氏は、江戸時代の中期に仙台藩伊達家の参勤交代のともとして江戸屋敷にきたが、どにような理由なのか不明だが奈良に出奔した。
② ５軒ある奈良の稲藤氏は相互の付き合いはない. 昔はあったかもしれない。
③ 家紋は「もっこう紋」である。(奈良と大崎の稲藤氏家紋)
④ 菩提寺は、曹洞宗三輪山慶田寺。戒重藩(芝村藩)織田家の菩提寺でもある。
⑤ 天理と桜井に稲藤姓は１軒ずつあるが、天理には柳本藩、桜井には戒重藩の本庁があり、初代はどちらも織田長益(有楽斎)の息子である。

７．さて地元紫波の稲藤家は３軒

紫波の上平沢に３軒「稲藤姓」がある。この稲藤氏は、稲藤大炊介の一族であったことは間違いない。いわゆる分家筋である。

この分家筋がなぜ紫波に残ったかの最大の理由は、天正１６年の南部信直が高水寺城の斯波詮直を攻めた時に、分家筋の稲藤氏は、本家筋の稲藤大炊介の斯波氏方に付くのではなく何故か大方の斯波氏の家臣と同じく、南部方に味方したとの伝説がある。

本家、分家あるいは兄弟が家名を残すために敵味方に分かれて戦うのは、戦国時代の運命でもあった。「家」を残すことが家督の最大の使命だった。

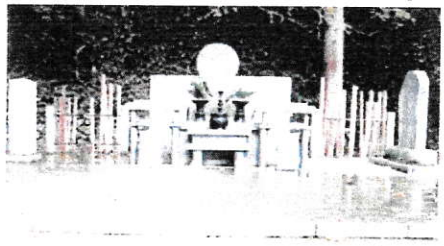
この戦で紫波の稲藤氏は戦功があったとのことから、戦後に南部家の「向い鶴」の紋を拝領している。以後、末裔はこれまで４３５年以上紫波に在住していることになる。

宮良男の「日本の仏教㉑曹洞宗(1)永平寺と道元」

希玄道元(高祖承陽大師・仏性伝東国師)について

正治２年(1200) 京都宇治で、父は内大臣久我通親(公卿)、母は伊子(関白大政大臣藤原基房の娘)の貴族の家系に生まれる。３歳にて父、８歳にて母を失う。

建保元年(1214) 叔父の頼顕を頼り天台座主公円の下、比叡山横川般若千光房にて剃髪染衣(得度)する。
三井寺の公卿」に栄西を紹介され、入宋を勧められる。



【写真右】 道元得度地(比叡山延暦寺横川)

建保５年(1217) 建仁寺の明全(臨済宗栄西の弟子)の弟子となる。

貞応２年(1223) 明全と共に宋に渡り諸山を歴遊する。

嘉禄元年(1225) 天童山景徳寺で３１世如浄禅師とめぐり合い正師と定める。
明全が示寂する。
「日本に帰って布教活動をする時、大都会に住むな、国王・大臣に近づくな、深山幽谷に住み、そして一人か半人の弟子を教育し、禅の教えを後世に伝えよ」←如浄禅師の教え

安貞元年(1227) 秋、悟りを得て(嗣書)帰国する。建仁寺に入る。
最初の弟子は明智(瑩山の母)

寛喜２年(1230) 山城深草の安養院に移る。『弁道話』を著し立宗宣言する。
⇒黙照禅　・修証一如

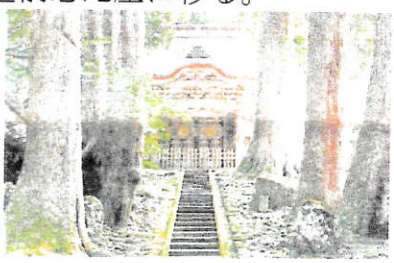
天福元年(1233) 同じ深草に観音導利院を建立し佛徳山興聖宝林寺(興聖寺)と改名する。

【写真右】興聖寺山門(京都宇治)

天福２年(1234) 道元ただ一人の法嗣である孤雲懐奘や日本達磨宗門下が随待する。
六波羅探題引付役の波多野義重公に正法眼蔵を説く。

寛元元年(1243) 比叡山からの迫圧を逃れ波多野義重の領地越前志比庄に移る。
←北越入山　老梅山吉峰寺

寛元２年(1244) 覚念等の外護で志比庄に傘松峰大仏寺を開き、２年後吉祥山永平寺と改める。



【写真右】吉祥峰永平寺唐門(越前志比庄)

宝治元年(1247) ８月から翌年３月まで鎌倉名越の白衣者舎で北条時頼に(最明寺入道)に説法する。←鎌倉行化　　『春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて涼しかりけり』←本来の面目(禅の極致)

建長２年(1250) 後嵯峨上皇から三度紫衣を贈られる。

建長４年(1252) 秋頃から病を患う。

建長５年(1253) 入寂を暗示され孤雲懐奘に住持を譲り、８月５日波多野義重の勧めで上洛する。　途中木の芽峠で徹通義介に後事を託し帰山せしめた。
８月２８日、療養先の京都高辻西洞院の弟子覚念屋敷で示寂する。
遺偈「渾身の力で生きた、もはや求めるものはない、生きながら黄泉に落つ」
京都東山丸山公園西行庵(建仁寺三味処)で荼毘に付し、９月１２日入涅槃式を挙げる。